



ぷらっとシネマ よその女の交情を見たいという欲望『中国の植物学者の娘たち』（ダイ・シージエ監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15467



よその女の交情を見たいという欲望—

『中国の植物学者の娘たち』(ダイ・シー・ジエ監督)

中国南部、湖に浮かぶ島の植物園に若い女性実習生ミンがやってきた。ミンを迎えたのは、植物学教授チェンと、その娘アンだ。歳も近い2人の女性は、ともに植物の採集や栽培をして教授を支える。大地震で両親を亡くした孤児院育ちのミンと、幼少時に母を喪い、気難しい父と暮らしてきたアン。孤独だった2人は互いに惹かれあい、心もからだも求めあう仲になる。しかし、2人の愛の生活にもやがて邪魔が入る。アンの兄タンが、ミンと結婚したいと言いだすのだ。ミンもアンも望まない結婚だ。しかし軍人であるタンは仕事柄、留守がちだから、愛しあう女性2人がずっと一緒にいるには、義理の姉妹となるのはうまい方便かもしれない。そう思案するうちに、結婚話は進んでしまう。方便としての結婚は、早くも新婚旅行の夜に破綻し、まずタンが、次いでチェン教授が2人の親密さに疑念を抱くようになる。来世の契りを交わした2人を待つのは、女性同士の愛を認めない社会からの苛酷な制裁であった。

最初に見たとき、この作品で批判すべき点は誰の目にも明らかだと思った。それは次の3点だ。第1に、女性2人が、孤独という以外の内面をもたず、なぜ互いに惹かれて愛しあうのかという描写が空白である。第2に、その空白の理由でもあり結果でもあるのだが、2人の若く美しい女性のエロティックな姿態を覗き見たい男性のためのレスビアン・ポルノである。第3に、美しい風景があれこれ登場するが、その美しさは「けれん」ともいべきあざとさに満ち、観光客を喜ばせる絵づくりである。要するに、薄っぺらな作品であり、レスビアン・セクシュアリティに関する内実ある表現をもって、従来のレスビアン・イメージに抵抗したり、観客の目や心を開いてくれたりといった映画ではないというのが私の結論だった。

そう結論して、この作品のことは忘れていた。それを3月下旬にロンドンで再度鑑賞したのは、新しい関心に駆られてのことだった。ロンドンの春はレスビアン・ゲイ(LG)映画祭の季節だ。第22回の本年は2週間で上映作品数が約200。そのなかに本作が入っていた。ロンドンのレスビアン女性観客は、この作品にどう反応するだろうというのが私の新しい関心だった。

すでに上映中から、前後左右の席にいるレスビ

アン・カップルたちの反応ははっきり見てとれた。怒りの舌打ち、感嘆の溜息、可哀想だという涙。つまり彼女たちは、チェン教授とタンがふるう男性権力の横暴に怒り、アンとミンの妖艶な交情にうっとりし、女性同士の愛を認めない社会の狭量さに義憤を覚えていた。上映後の人々の会話でも同様の反応を確認できた。私の新しい関心は、新しい問いに変わった。少数派のセクシュアリティを生きる当事者である女性たちなら、レスビアニズムに対する社会的圧力の現実をよく知っており、レスビアン・イメージの商品化に対する批判精神ももっているはずだ。いったい本作の何が、そんな女性たちを易々と感動させ、商品と化したレスビアン・イメージの消費者にするのだろうか。

監督ダイ・シー・ジエは、17年前に映画『中国、わが痛み』で中国政府の不興を買って以来、フランスを拠点に製作している人だ。本作ロケも中国では許されず、ベトナムで行なわれた。LG映画祭は、映像表現を通してセクシュアリティ解放を進めようという趣旨だから、本作のように、レスビアニズムというテーマ性ゆえに権力から嫌われる作品は、それだけで高く評価される傾向がある。監督が中国政府と折りあいの悪いダイであればなおさら、セクシュアリティの弾圧と表現の不自由に闘いを挑む作品と観客は見る。

そこに、私の問いの答えがあるだろう。つまり、いつもならレスビアン・イメージの商品化を批判するはずの人々が批判精神を鈍らせるのは、ここにある「異文化／中国という仕掛け」のせいである。西洋世界の観客が抱くオリエンタリズム的欲望を、この作品は幾重にも満たしてくれる。まずは、アジア的美貌とエロティシズムを見たいという欲望(欲望の主は男に限らない!)。その覗き見欲望への批判をかかずために、監督の反権力に共感することで、みずからの正しさも確信したいという欲望。そしてその裏で、レスビアンに無理解なよその社会の後進性を確認したいという欲望。この3重の欲望を発動させるうえで、「異文化／中国という仕掛け」は欠かせない。

そう気づいてみれば、日本語と英語のタイトルがわざわざ「中国の」と謳う理由も(フランス語原題を訳せば『植物学者の娘たち』、見えてくる気がする。(フランス、カナダ、2006年、96分))